

5 まとめ

「電子図書館レポート'99」では 98 年 6 月に設置された研究開発室に所属する教官の研究成果を中心とした活動状況、およびこれまでの本学附属電子図書館の利用状況について報告した。さらに今後の電子図書館に関連する研究の方向性の一部が報告できたものと考えている。

本学附属電子図書館が運用を開始した 1996 年当時は、新しい技術としての電子図書館に対する社会の注目が高く、また日本で初めての大学附属電子図書館であることでも一つの理由となって注目を集めた。開館後 3 年半以上を経過して社会の関心も開館時程ではなくなり、また、本学の他にも学術情報センターを始めとして、京都大学、東京工業大学、筑波大学、図書館情報大学、神戸大学にも電子図書館が開設され、電子図書館が特殊なものではなくなりつつある。しかし、電子図書館が一般的になったという状況でもなく、本学を始めとした電子図書館を運営している大学の実績がとわれる時代になりつつあると認識している。

電子図書館とは、計算機を用いた高度な情報システムの一つであり、その発展のためにはたゆまぬ研究が不可欠である。本学電子図書館は 1996 年に運用を開始したが、実際にはその 2 年程前からプロトタイプを作成し、一次情報の入力法の確立やその提示方法など、実現に向けた研究が情報科学研究科において行われていた。実現可能性の議論の開始はさらに 1、2 年遡る。電子図書館をテーマとした最初の国際的な会議は 1993 年ごろであったので、世界的に見ても十分先端的であった。この先進性を維持していくためにも、研究開発室の役割は重要である。

一部では、電子図書館は情報システムの一つであるという考え方がなされはじめている。特にインターネット上に存在する他の情報システムとの区別に意味がなくなりつつある。しかし、「電子図書館」という言葉の響きからはどうしても旧来からある「図書館」のイメージが払拭しきれず、その実体が正しく反映されないきらいがある。これらを含めたより深い考察が求められており、研究開発室の重要な責務の一つであると考えられる。

このように、問題は山積しているのが実情であり、研究開発室がそれらの問題を一つずつ解決していかなければならない。関係各位の御指導、御鞭撻をお願いして本報告のまとめとさせていただきます。